

災害遺構をはじめとした退廃空間の印象特性とそのメッセージ性

中田直輝¹・平野勝也²

¹学生会員 東北大学大学院工学研究科土木工学専攻 博士課程前期2年
(〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1, E-mail: naoki.nakada.q4@dc.tohoku.ac.jp)

²正会員 博士(工学) 東北大学 災害科学国際研究所
(〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1, E-mail: hirano@tohoku.ac.jp)

世界各地に存在する廃墟は、退廃した空間でありながら人々を惹きつける力を秘めている。退廃空間の印象特性及びそのメッセージ性を明らかにする為に、退廃空間の対比構造と図像的情報以外に与えられる文字情報に着目し、評価実験を行った。その結果、退廃空間の対比構造による印象の特性、図像的情報によるメッセージ性について明らかにし、退廃空間の性質による図像的效果について示した。また、得られた退廃空間の印象特性とメッセージ性の結果から災害遺構に対して当てはめ、災害伝承において実物資料として果たす役割の大きい災害遺構についての提言を行った。

キーワード: 廃墟、退廃空間、災害遺構、図像的情報、メッセージ性

1. はじめに

(1) 背景

2011年に発生した東日本大震災から9年半が経過し、被災地では復興が着実に進行している。しかし時間の経過の中で、人々の震災に対する記憶が希薄化していることもまた事実である。新しい町が作られていく中で、かつてそこにあった町、人々の暮らし、文化、それらを奪った災害の痕跡も徐々に無くなるようとしている。以前の町の記憶、災害の記憶をどのように後世に伝承し、実装していくかを検討していくが現在の被災地の復興において重要であると考えられる。

災害を後世に伝承していく上で、災害の被害を実物資料としてとどめる災害遺構のなす役割は非常に大きいと言える。災害遺構は情報機器が普及した現代においても、街に記憶を内包させることができ、昔の町の姿や災害の記憶を、場所を移すことなく遺す事ができる。

しかしながら災害遺構の保存に関しては賛否が分かれており、保存が決まったもの、撤去が決まったもの、実際に撤去されたものとその対応は場所によって様々である。

ところで昨今、日本における廃墟趣味の大衆化など、一般に廃墟という存在が認知されるようになってきている。人類の廃墟への興味は最近に始まったことではなく、西欧においてルネサンスやロマン主義での古代遺跡を中心

とした廃墟への関心の高まりから、芸術のモチーフとして廃墟を用いたり、環境の中に廃墟を取り入れたりするなど、人々は廃墟という退廃空間へ注目してきた。また現代においても、映画「猿の惑星」のラストシーンで登場する廃墟と化した自由の女神像はその場所が地球である事、そして人間社会の崩壊を否応なく語る装置として見る者への強烈なインパクトを与えた。退廃空間は人々の暮らしの中の日常風景からかけ離れた異端な空間へ人々を誘い、想像力の喚起を促し、空間の記憶を保持し、過去と現在との時間的な隔たりを接続する装置として機能する。退廃空間が長きにわたり人々を惹きつけてきた理由について解明する為には、退廃空間が人々にとってどのような視覚的な情報を与え、人々にどのような感情を抱かせてきたのかを明らかにすることは重要であると考えられる。

一方で自然災害や人為災害によって生じた災害遺構もまた、本来の空間の目的を放棄せざるを得なくなった退廃空間であると言える。その機能も昔の町の姿や災害の脅威といった過去の記憶を現在に繋げる装置として共通しており、災害遺構の本質的側面は退廃空間として捉えられると考えられる。今後どのような災害遺構を保存していくことが災害の大きさや恐ろしさ、そこにあった人々の営みの記憶を後世に遺す事ができるのかを検討していく上では、災害遺構を退廃空間として捉え、その図像的な効果を明らかにする事が必要であると思われる。

(2) 既存研究

廃墟に関する研究は岡田¹⁾が廃墟としての産業建造物の意味論および評価論を提起したが、廃墟そのものの特徴とその印象の特性、図像的情報と文字情報による印象の変化に関しては明らかになっていない。

また篠原、北川²⁾が廃墟写真における評価構造から見る退廃空間の付加価値に関する研究を行っており退廃空間を見た人の評価構造に着目し、評価内容から観測者の分類を行なったが、廃墟そのものの特徴とその印象の特性、図像的情報と文字情報による印象の変化に関しては明らかになっていない。

一方で、災害遺構に関する研究も多数され、石原³⁾は災害遺構における保存・維持管理の実態把握から提言を行なった。また石原⁴⁾は雲仙・普賢岳噴火災害の遺構である旧大野木場小学校被災校舎を事例として、災害遺構が有する価値を多様な価値を定量的に明らかにし、地域住民が認識する災害遺構の価値構成を把握した。

しかし、いずれにおいても災害遺構の視覚的な印象に着目しておらず、災害遺構の図像的情報が持つメッセージ性については明らかになっていない。

(3) 研究の目的

以上の背景および既存研究を踏まえ、本研究の目的は、災害遺構をはじめとする退廃空間の性質ごとの視覚的な印象の特性を捉え、退廃空間の図像的情報が持つ「その場所がどのような場所だったのか」、「どのような退廃過程を辿ったのか」といったストーリーを語るメッセージ性について検証し、退廃空間の性質と視覚的機能の関係性を明らかにすることとした。

(4) 研究の方法

災害遺構をはじめとする退廃空間の視覚的な機能について考えるにあたり、世界各地に所在する様々な形態の退廃空間を網羅的に体系化した上で退廃空間の視覚的印象に着目した評価実験を行い、性質ごとの印象の違いや図像情報以外の情報による印象の変化を刺激ごとの差異がわかるように示す事によって、退廃空間の印象特性や図像情報の持つメッセージ性について明らかにする事ができると考えた。

まず退廃空間をその空間的性質ごとに網羅的に分類を行い、退廃空間の空間的特徴を体系化する。この分類に基づき退廃空間の印象を測る評価実験を行うことによって、退廃空間の性質ごとの視覚的な印象の特性を明らかにする事ができると考えた。

次に退廃空間への情報を与え同様の評価実験を行う。この結果と前述の印象評価を測る評価実験の結果とを比較し退廃空間の性質による印象の変化を検証する事で、退廃空間の図像的情報が持つメッセージ性について明らかにする事ができると考えた。

以上の方法によって視覚的印象の特性、メッセージ性についてを明らかにすることにより、どのような性質の退廃空間が過去の記憶の伝承、継承という上で重要であるかという事を提言を行った。

2. 実験概要

(1) 退廃空間の分類の枠組み

退廃空間をその性質ごとに分類し、退廃空間における性質を分類した枠組みに当てはめて印象評価を行う。しかしながら、指標となる退廃空間をその性質で分類した明確な枠組みは一般化されていない。そこで退廃空間の性質ごとに網羅的に分類ができる枠組みを検討した。

(2) 枠組みの設定

Christopher Woodwardは自身の著書⁵⁾にて廃墟を巡る文学、美術、建築作品等を渉猟する事によって人間が廃墟とどのように向き合ってきたかを展開した。本書に於いてWoodwardは「ピクチャレスク」という理念を重要視している。Woodwardは「ピクチャレスクの成否は、突如現出する対比の妙にかかっている」と述べており、退廃空間の視覚的印象の形成には、その対比構造が重要であることが示唆されている。

よって退廃空間における性質を空間での対比構造に着目することによって、網羅的に分類をすることができるのではないかと考えた。

ここで退廃空間における対比の構造について、以下の3点について着目をした。

一つ目は対比の現出の時間変化に関するものである。空間が廃墟化する原因として、ある空間が様々な理由によって放棄されその後連続的な時間変化によって廃墟化したものと、自然災害、人為災害などのある短い不連続的な時間変化で生じた破壊や崩壊によって廃墟化したものが挙げられる。この対比の現出の時間的な連続性を退廃空間の対比構造の分類の一つの軸と定めた。

二つ目は対比の性質に関するものである。空間の廃墟化の様態として、廃墟化によって空間的な差異が生まれるものと、廃墟化によって空間的に均一な様態へと変化するものが挙げられる。岡田⁶⁾はテクノスケープのイメージの分類として既存の場所（コンテキスト）に対して溶け込んでいるか、溶け込んでいないかというイメージを分類している。このイメージ分類を応用し、コンテキストを空間内外という視点に広げ、空間的な差異が生まれている退廃空間を「異化」、均一な空間として溶け込んでいるものを「同化」の対比が生じているとしてイメージを分類し、この対比の性質を退廃空間の分類の一つの軸と定めた。

三つ目は対比の発生箇所に関するものである。退廃空

間における対比は、退廃空間と周辺環境と対比が生じる外的な対比、退廃空間内で対比が生じる内的な対比を考えるものとして、この対比の発生箇所を退廃空間の対比構造の分類の一つの軸と定めた。

以上の退廃空間における対比の構造の3観点各2分類の組み合わせ計8つに退廃空間を分類する事で退廃空間を性質ごとに網羅的に分類できると考えた。(表-1)

表-1 退廃空間の対比構造に着目した枠組み

対比構造	分類
対比現出の時間的連続性	連続 ⇄ 不連続
対比の性質	同化 ⇄ 異化
対比の発生箇所	外的対比 ⇄ 内的対比

(3) 刺激の準備

a) 刺激の選定

刺激の選定においては、世界や日本の廃墟や廃船などを紹介している写真集⁷⁾⁸⁾⁹⁾に掲載されている廃墟及び、東日本大震災の災害遺構から選定した。また、被験者が全員が成人の日本人であるということから全員が知っているという仮定のもと広島原爆ドームも選定した。

前項で考えた退廃空間の性質から仮定した枠組みの各分類に2つ、若しくは3つの施設が含まれるように全20施設の選定を行なった。(図-1)

刺激画像としては撮影者から使用の許可を得た対象施設の写真及び、Googleの画像によって対象の施設を検索し、対象施設の全体像が把握できるように撮影された写真のうちライセンスが「改変後の非営利目的での再使用が許可されたもの」を使用した。

	内的対比	外的対比
異化		
同化		

図-2 枠組みの分類をもとに選定した刺激
※青…時間的連続変化、橙…時間的不連続変化

b) 刺激画像の規格

対象とする刺激写真のピクセル数を624×416に統一をした。

また対象施設の壁面などに書かれている施設の名称などの文字情報はAdobe Photoshop CC 2015においてレタッチ機能を用いて削除した。

(4) 評価項目について

退廃空間の印象を捉える為の評価項目としては、岡田¹⁰⁾が18世紀の英国で誕生したピクチャレスク庭園をもとに廃墟の価値付け法として、アイキャッチャー、自然景観、尚古象徴、うつろい景観の4点を指摘しており、これらをもとに検討することにした。この4点についてそれぞれ2項目に、退廃空間が観る人を惹きつけるかどうかという「興味がある」、「行ってみたいと思う」という2項目、退廃空間の想像力の喚起を促す装置としての機能を測る為の「想像力が喚起される」という1項目を加えた計11項目を評価項目とした(表-2)。

表-2 選定した評価項目

No.	観点	評価項目
1	見る人を惹きつける	興味がある
2		行ってみたいと思う
3	想像力喚起	想像力が喚起される
4	アイキャッチャー	印象が強い
5		目立つ
6	自然景観	自然的
7		平凡な※(異様な)
8	尚古象徴	過去の
9		近寄りがたい
10	うつろい景観	生を感じる※(死を感じる)
11		時間が動いている※(時間が止まっている)

なお※の項目は対義の括弧内の表現で印象評価に用いた。

3. 評価実験

(1) 実験の手続き

a) 実験の被験者

実験は被験者20代男女30名(男性24名、女性6名)で行なった。

b) 印象を測る評価実験(実験①)

実験は完全順位法により行なった。

刺激として用意した20枚の写真にAからTまで無作為に割り当てた。被験者にAから順に全ての刺激について1枚ずつ提示したのち、20枚全ての刺激を同時に提示し、11の項目それぞれについて20の刺激全てについて最もそう思う刺激から順に並べ替えを行なわせた。

c) 文字情報による印象の変化を測る評価実験(実験②)

評価実験①を行なった後、再び刺激写真について、廃墟化以前について、廃墟化の原因についての70字程度の説明書きを刺激写真の下部に同時に表示し、印象評価①と同様にAから順に1枚ずつ提示した(図-2)。全ての刺激について1枚ずつ提示したのち、再び20枚全ての刺激を同時に提示し、11の項目それぞれについて20の刺激全てについて同様の並べ替えを行なわせた(図-3)。

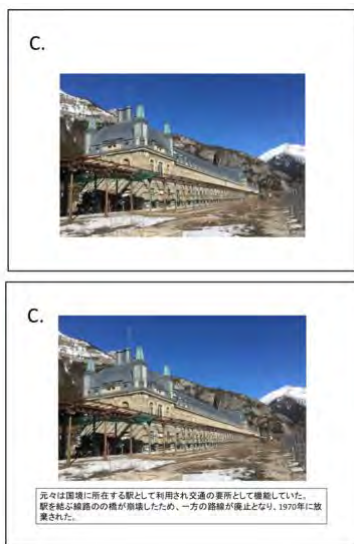


図-2 一枚ずつ提示した刺激の例(上：実験①，下：実験②)



図-3 並び替え時の刺激(実験①，実験②共通)

4. 実験結果及び考察

(1) 順位データの変換

実験で得られた印象評価の各被験者のデータは各項目について一番そうだと思う順に並べられたものである。この結果を最もそう思う順に1から20の順位をつけた。この順位データを、刺激間の違いがどの程度なのかを詳しく捉える為に、各退廃空間同士の順位をサーストンの一対比較法によって一対比較した場合と捉え参考文献⑩を参考にとりて心理尺度値に変換を行なった。この心理尺度値を用いて分析を行なう事とした。

(2) 実験①の結果に対する考察

a) 心理尺度値プロフィール

各刺激の項目ごとの心理尺度値をみた。(図-4) 心理尺度値の解釈としては各刺激を距離尺度上に乗せたときの位置を表しているので、値が小さいほど上位の順位に選ばれやすいということになり、その評価項目の印象を強く受けやすいと解釈できる。

枠組みとして仮定した3つの観点で刺激を分類しその特徴を捉えることにした。

はじめに退廃過程の時間に着目すると、不連続変化の退廃空間は興味や、行って見たさが湧きにくい傾向にあり、連続変化の退廃空間は興味や行って見たさが湧きやすい傾向にある(図-5)。

対比の性質について着目すると、異化が生じる退廃空間は印象を強く与えやすく、同化が生じる退廃空間は印象が弱くなりやすい傾向にある。異化が生じる退廃空間は異様だと感じやすく、同化が生じる退廃空間は異様だ

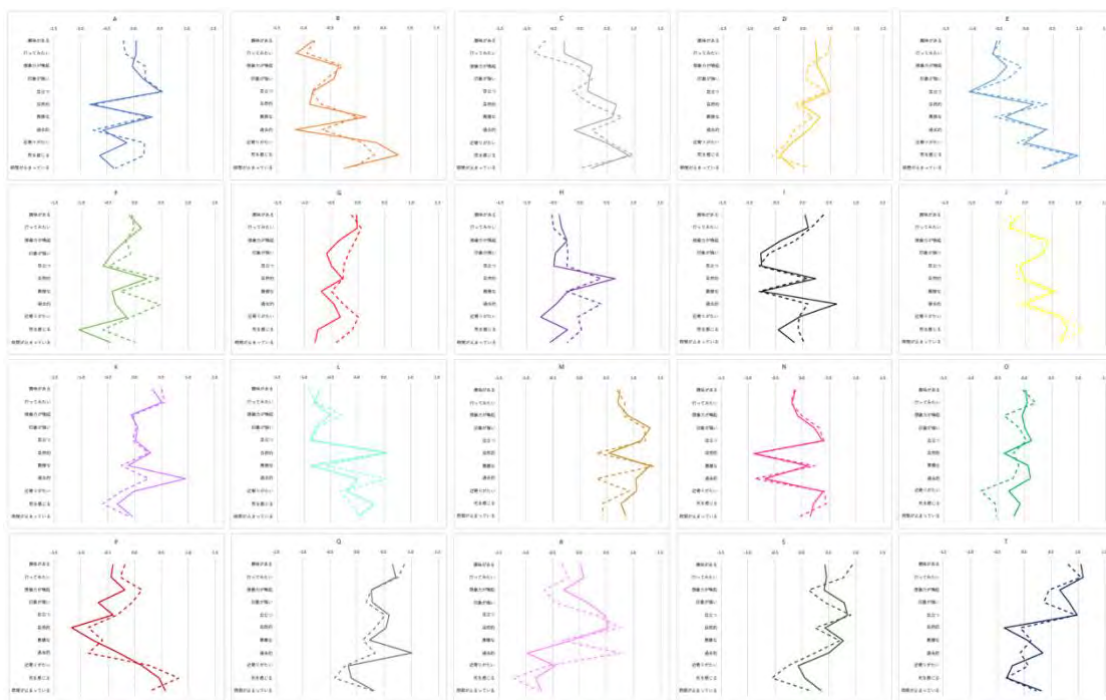


図-4 各刺激ごとの心理尺度値プロフィール
実線：実験①，破線：実験②

と感じにくくなっている傾向にある(図-6)。

対比の発生箇所について着目すると、外的対比が生じている退廃空間は想像力が喚起されやすく、内的対比が生じている退廃空間は想像力が喚起されにくい傾向にある。また外的対比は時間が止まっているように感じやすく、内的対比は時間が動いているように感じる傾向にある(図-7)。

以上のことから、対比構造に着目した枠組みによる分類が退廃空間の印象特性を示すことが示唆された。

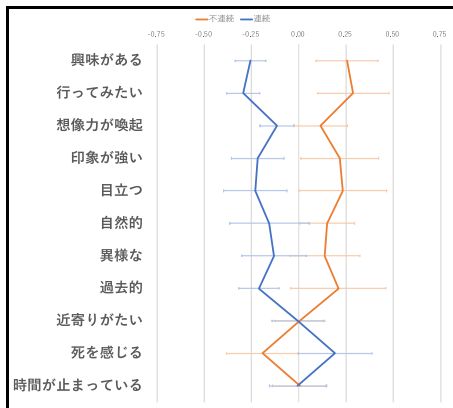


図-5 心理尺度値プロフィール(退廃過程の時間による分類)

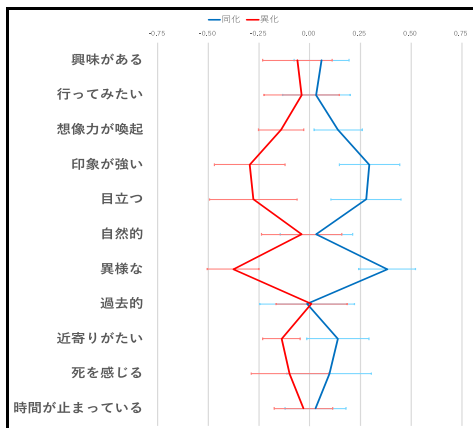


図-6 心理尺度値プロフィール(対比の性質による分類)

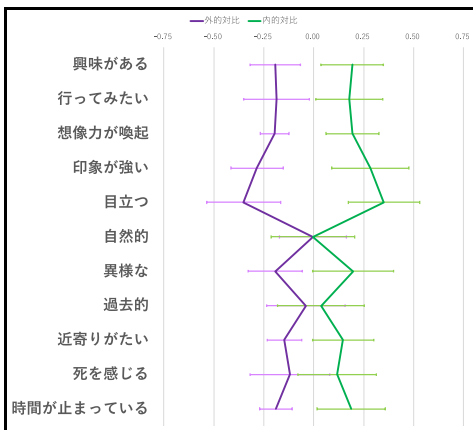


図-7 心理尺度値プロフィール(対比の発生箇所による分類)

b) 災害遺構における印象特性

次に退廃空間の中でも東日本大震災の災害遺構に焦点を当てその印象特性を捉える。

災害遺構において起こり得る退廃空間の対比構造は人為災害、自然災害共に不連続的な時間変化によって生まれるものが殆どであると言える。前述より不連続変化の退廃空間は興味が湧きにくく行ってみたいと思わずらい事が明らかになっており、災害遺構は関心を集めづらいついと言える。その為、如何に退廃空間としての価値を引き出し、観る者に災害の記憶が伝わるようにするかが重要であると考えられる。

一方で異化が生じている退廃空間は印象を強く与えやすく、外的対比が生じている退廃空間は想像力を喚起させやすい。よって災害の記憶を伝承させる上で、外的対比によって異化が生じる災害遺構が図像的な印象が強く、その果たす役割は大きいと言える。

しかし、今回の刺激Iとしても用いた東日本大震災における災害遺構である第18共徳丸は、外的な異化を生じさせている災害遺構ではあるものの、2013年に撤去が完了しており、必ずしもそのような災害遺構が保存に至っているという訳ではない。外的対比によって異化が生じている災害遺構は災害伝承という上では非常に効果的であると思われるが、被災直後や復興の途中の段階においては、被災地域の住民に災害の辛い記憶をフラッシュバックさせてしまうだけの存在になってしまうかもしれない。よってこのような災害遺構は保存の議論が本格的に交わされるようになるまでの管理の仕方についても配慮して十分な措置をとっていく必要があると考えられる。

(3) 実験②の結果に対する考察

a) 因子分析

実験①、実験②で得られた心理尺度値をもとに因子分析を行なった。ここで今回の被験者が全員日本人であるということから原爆ドーム(記号:F)は文字情報による印象の変化はないという仮定のもと、図像情報のみの実験①の結果及び文字情報を与えた場合の実験②の結果における原爆ドームの各項目での心理尺度値を基準0としてそれぞれの結果を結合した。この原爆ドームを基準とした心理尺度値を用いて因子分析を行なった。因子の抽出には最尤法を用い、プロマックス回転を行なった。因子数の決定にはスクリーテストを採用し因子数は4とした。その結果、4因子での累積寄与率は0.836となった。

因子負荷量から各因子の解釈を行なった。第一因子は、「興味がある」、「行きたい」、「想像力が喚起される」などの項目での負荷量が大きく、「魅力」を表すものと解釈した。第二因子は、「目立つ」、「印象が強い」、「異様な」などの項目の負荷量が大きいことから「奇想性」を表すものと解釈した。第三因子は「近寄り

がたい」, 「死を感じる」, 「時間が止まっている」などの項目での負荷量が大きく, 「空虚性」を表すものと解釈した。第四因子は「自然的」, 「過去の」などの項目で負荷量が大きく, 「懐古性」を表すものと解釈した(表-3)。

表-3 因子負荷量

評価項目	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
2 行きたい	1.002	-0.011	-0.186	-0.010
1 興味がある	0.948	0.019	-0.035	0.063
3 想像力を喚起される	0.545	0.292	0.426	-0.135
7 異様だ	-0.194	0.992	0.055	0.011
4 印象が強い	0.111	0.832	0.120	0.106
5 目立つ	0.290	0.828	-0.265	-0.023
10 死を感じる	-0.377	-0.005	0.921	0.019
11 時間が止まっている	0.220	-0.147	0.898	0.313
9 近寄りやすい	-0.092	0.227	0.704	-0.155
8 過去の	0.046	0.011	0.207	0.957
6 自然的	-0.094	0.130	-0.163	0.715
寄与率	0.231	0.231	0.23	0.144
累積寄与率	0.231	0.462	0.692	0.836

p 値 0.158

b) 退廃空間の性質と因子の関係性

退廃空間の対比構造に着目した枠組みごとの印象の特性と因子分析によって導かれた因子との関係性について考察した。

対比の現出の時間変化に着目した場合の分類で違いが生じた「興味がある」や「行きたい」という評価項目は第一因子に於いて負荷量が大きくなっており, 退廃過程の時間が第一因子の「魅力」に大きく影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

対比の性質に着目した場合の分類で違いが生じた「印象が強い」や「異様だ」という評価項目は第二因子に於いて負荷量が大きくなっており, 対比の性質が第二因子の「奇想性」に大きく影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

対比の発生箇所に着目した場合の分類で違いが生じた「想像力の喚起」や「時間が止まっている」という評価項目については特定の因子との関連は見られなかった為, 対比の発生箇所が特定の因子に決定的な影響を及ぼしていないことが考えられる。

以上のことから退廃空間の対比構造によって印象の特性が生まれる事が示唆された。

c) 退廃空間の性質と因子の関係性

次に図像情報のみの印象評価の結果と図像情報に文字情報を与えた場合の印象評価の結果を比較した(図-8)。

第一因子に注目すると, 多くの退廃空間では魅力が僅かに低下しているか, ほぼ変化していない事がわかる。このことから退廃空間の「魅力」の決定には図像的な情報が強い影響を与えることが考えられる。

第二因子に注目すると多くの退廃空間での得点が低下しており, 文字情報を与えられることによって「奇想

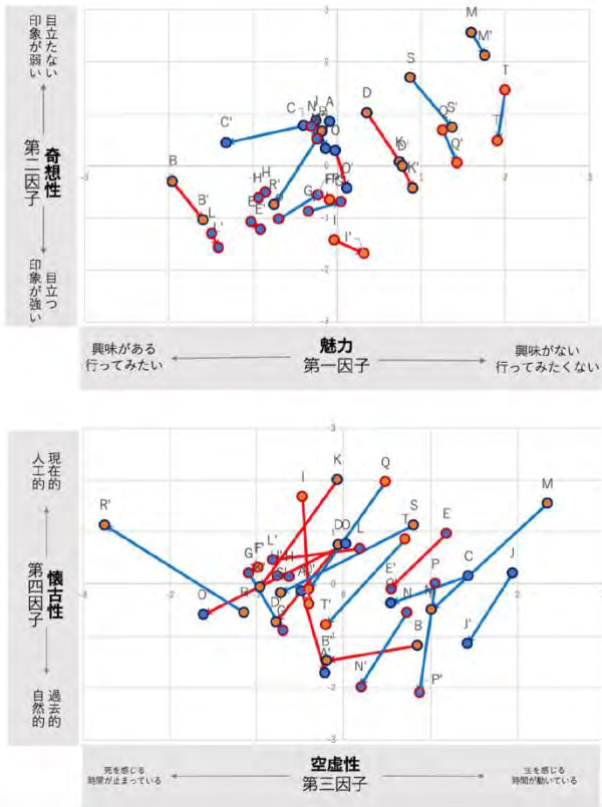
性」が上昇することがわかる。退廃空間の対比構造に着目してこれを捉えると, 不連続変化の退廃空間の方が連続変化の退廃空間に対して「奇想性」が大きく上昇している傾向がある。一方, 連続変化での異化が生じている退廃空間では第二因子の得点が増加, 若しくは減少の幅が小さくなっており, 文字情報を与えられる事によって奇想性が低下若しくは殆ど変化しないことがわかる。これは前述の考察でも述べたように異化が生じている退廃空間は「奇想性」が高い傾向にある為, 図像的な情報のみで「奇想的」と感じる退廃空間, その中でも連続変化によって対比が生じている「魅力」が高い退廃空間は文字情報を与えられる事による「奇想性」の上昇は無いと考えられる。よって文字情報を与える事によって, 退廃空間に秘められた「奇想性」を引き出す事ができると示唆された。

第三因子に注目すると, 殆どの退廃空間で「空虚性」が上昇している事がわかる。空虚性が殆ど変化していない, 若しくは低下している退廃空間は, 図像的な情報のみの印象で空虚性が高かったものである。よって文字情報を与える事によって, 退廃空間に秘められた「空虚性」を引き出す事ができると示唆された。

第四因子に注目すると, 殆どの退廃空間で「懐古性」が上昇している事がわかる。このことから文字情報を与える事によって, 退廃空間に秘められた「懐古性」を引き出す事ができると示唆された。例外的にRのみが大きく「懐古性」が減少しているが, これについては設けた枠組み, 施設の認知度等を鑑みても理由はわからなかった。

刺激源に関して, 印象の変化が少なかったのは, 他の廃墟に比べ, Fと同様に一般的に知られているからではないかと考えられる。

以上の結果及び考察から, 図像情報に加えて文字情報を与えられると, 退廃空間としての価値が弱い, 若しくは伝わりづらい場合に, その価値を引き出す, 若しくは観るものに伝える事ができるのではないかと考えられる。よって文字情報などの補助的な情報を与えるに事によって退廃空間の持つ価値を活かす事ができるのではないかと示唆された。



d) 災害遺構における印象の変化

東日本大震災の災害遺構の刺激 (D, I, K, M, Q, S, T) につ

図-8 因子得点分布図

矢印(赤: 外的対比, 青: 内的対比), 点枠(赤: 異化, 青: 同化), 点中心(橙: 不連続変化, 青: 連続変化)
 各刺激アルファベットのみ: 実験①結果の因子得点, 「'」
 付きアルファベット: 実験②結果の因子得点
 いて焦点を当てて, その印象特性とメッセージ性について考察した.

印象特性については, 東日本大震災の災害遺構は全体的に第一因子の「魅力」が小さいことが分かる. また多くの災害遺構において第二因子の「奇想性」についても小さいことが分かる.

次に図像的メッセージ性を捉えるにあたり, 図像情報に文字情報を与えた場合に印象評価が大きく変化する場合は図像的メッセージ性が弱く, 逆に印象評価が変化しない場合は図像的メッセージ性が強いという解釈をした.

第一因子に注目すると, 多くの災害遺構で「魅力」の変化が小さく図像的メッセージ性が高いと考えられる. 特に異化による対比の変化が小さく, 特に図像的メッセージ性が強いということが考えられる.

第二因子に注目すると全体的に「奇想性」の変化は小さく図像的メッセージ性が強いと言えるが, 特に外的異化の災害遺構の変化が小さく図像的メッセージ性が特に

強いことが考えられる.

第三因子に注目すると, 外的異化の災害遺構は変化が小さく, それ以外の災害遺構は大きく変化している事がわかり, 外的異化の災害遺構のメッセージ性が強く, 他の災害遺構ではメッセージ性が弱い事が考えられる.

第四因子に注目すると, 全ての全ての災害遺構で変化が大きく, メッセージ性が弱いことが考えられる.

以上のことから, 災害遺構におけるメッセージ性は, 「外的異化」によって対比が生じるものが特に強く実物資料としての機能が非常に高いということが考えられる.

5. 結論

以上の結果, 考察より, 退廃空間の印象の形成にはその対比構造が少なからず関係している他, 図像的情報の持つメッセージ性と文字情報が与えられる事による効果が明らかになった. 具体的には以下の通りである.

- 退廃の時間によって退廃空間の「魅力」が変化し, 連続的な時間変化による退廃過程を送った退廃空間の方が「魅力」が増す.
- 退廃の性質によって退廃空間の「奇想性」が変化し, 異化が生じる退廃空間の方が, 「奇想性」が増す.
- 退廃空間の魅力は図像的情報が強い影響を与える.
- 図像的情報に加え退廃空間に関する文字情報を与えると退廃空間としての価値が引き出される.

また災害遺構のメッセージ性については, 以下のような事が考えられた.

- 災害遺構は不連続変化による退廃空間のため図像的「魅力」は乏しい.
- 外的異化による対比が生じている災害遺構はメッセージ性が高く実物資料としてなす効果が大きい.

一概に退廃空間としての価値が高く, 図像的なメッセージ性が強い災害遺構であれば, 必ずしも保存すれば良いということではない. しかし, 実物資料としての価値が高い災害遺構が, 災害伝承において大きな役割を果たすことは考えられる.

参考文献

1) 岡田昌彰: 産業廃墟景観論・試論, ランドスケープ研究, 64巻5号, pp.765-768, 2000
 2) 篠原里織, 北川啓介: 廃墟写真における評価構造から見

る退廃空間の付加価値, 日本建築学会東海支部研究報告書, 第 56 号, pp.573-576, 2018

- 3) 石原凌河, 松村暢彦: 維持管理の観点から見た災害遺構の保存に関する研究 雲仙普賢岳噴火災害・中越地震の災害遺構を事例として, 都市計画論文集, 48 卷 3 号, pp. 861-866
- 4) 石原凌河: 災害遺構の保存に対する住民評価に関する研究 雲仙普賢岳の噴火災害遺構「旧大野木場小学校被災校舎」を事例として, 都市計画論文集, 50 卷 3 号 pp.859-865, 2015
- 5) Christopher Woodward: 廃墟論, 森夏樹訳, 青土社, 2016, In Ruins, Vintage Books, 2002
- 6) 岡田昌彰: テクノスケープ 同化と異化の景観論, 鹿島出版界, 2003
- 7) 佐藤健寿: 世界の廃墟, 飛鳥新社, 2015
- 8) アフロ, 水野久美: 世界の廃船と廃墟, 青幻舎, 2017
- 9) Thomas Jorion: 世界の美しい廃墟, 岩澤雅利訳, パイインターナショナル, 2015, Silencio, Editions de La Martinière, 2013
- 10) 遠藤健治: 例題からわかる心理統計学, 培風館, p. 190-193, 2002